

ある「西洋の」保守主義者

ラフカディオ・ハーンと一九世紀のアメリカ

中川智視

はじめに

ラフカディオ・ハーン（一八五〇—一九〇四）の作品は、日本に関連するものも含め、すべて英語圏の読者向けに英語で執筆されている。日本に帰化して以降も、彼がその著作を世に出すさいには、日本名である「小泉八雲」ではなく、英名を用いている。彼のすべての作品は、出版メディアを通じて、来日後も文筆家としての経歴を積んだアメリカと、きわめて密接な関係があった。本論文は、このことをふまえ、彼が日本で執筆した比較的初期の作品と、アメリカとの関係を考える試みである。

そのひとつの方法論として、彼の作品の主たる読者層を確定することから始め、ついでその読者層の価値規範を考える。リチャード・H・プロドヘッドは、作家と文学作品、そしてその周縁にある事情を鑑みながら、文学作品を読み解く必要性を説いている¹⁾。

本論ではそのような周縁の事情というべき一九世紀アメリカの状況を概観したうえで、ハーン作品「ある保守主義者」を検討する。ハーンが活躍した時代は、アメリカにおいて資本主義化に起因するさまざまな変容が起きていた時代でもあり、彼の作品はこの変容とおおいに関係があると考えられる。とりわ

彼の作品内で頻繁に用いられる語彙が持つ意味に着目し、いかに彼の作品が同時代のアメリカの特定の価値規範と、密接に連動しているのかを考える。彼の作品に通底する価値規範は、

「ハイ・カルチャー」に、そのひとつの源流を求めることができるだろう。そしてこのような価値規範を守るひとつの重要な砦の役割を果たしていたのが、ハーンが初期作品を寄せた雑誌、『アトランティック・マンスリー』である。

一 『アトランティック・マンスリー』

ここでは、一九世紀に知的影響力を誇った雑誌『アトランティック・マンスリー』（以下『アトランティック』誌と略記）の編集趣旨と、その読者層を概観する。ハーンは来日以降、五つの作品を『アトランティック』誌の出版社であるホートン・ミフリン社から出版している²²。

ハーンの仕事とその読者層に関する問題は、平川祐弘と太田雄三によってすでに指摘されており、いずれもハーンが白人中産階級を意識していたことを、再話作品の書き換えから推論している²³。それはいずれも一夫一婦制以外の結婚に関することで、読者に一夫多妻を想起させないための腐心であるといえるが、この書き換えはユタ州の編入をめぐる合衆国内で論議が

巻き起こっていたことと、あなたが無縁ではないと思われる²⁴。そしてこの書き換えは、ハーン自身が読み手にごく近似する価値規範を持っていた可能性も、また窺わせる。

エラリー・セジウィックは、『アトランティック』誌の初代編集長ジェイムズ・ラッセル・ローウェルから七代目ブリス・ペリーまでの各編集長の方針を、概説的に紹介する²⁵。『アトランティック』誌の創刊に関わったポストンの知識人たちは、「美だけでなくアメリカの道徳的な価値と理想を創出し伝え」ること、そしてそれが広く影響力を及ぼすために先導役や牽引役を担うことを責務として認識していた²⁶。したがって理想主義はいうまでもなく、彼らの根底には少数の知的に有能な人物が大多数の人々を導くという、エリート主義的な発想も内包されている²⁷。創刊当時の関係者が抱く理想的人間像は、道徳や美のみならず知性においても、高い水準を要するものだった。

ハーンが『アトランティック』誌で活躍した時期の編集長はホレス・イライシャ・スカダー（一八三八—一九〇二）で、雑誌自体が商業主義と知的良心との折り合いをめぐる曲がり角を迎えていた。台頭する資本主義に対し、スカダーは保守的な志向を強め対抗する。彼は草創期の執筆陣を尊重するなど伝統に依拠し、ハイ・カルチャー化を推進した。したがってハーンの文学観も、草創期の執筆陣のそれと近似したものであったとい

える。理想主義的で作品の道徳的価値を重視する一方、自然主義やホイットマンの低評価などに表れるように、大胆で冒險的な方針を掲げることはなかった。そして一八九〇年代の『アトランティック』誌の売上は、一万部前後を推移していた⁸⁾。スカダー以降の『アトランティック』誌は理想主義的なハイ・カルチャー色を薄め、より現実主義的なジャーナリズム志向を強める⁹⁾。

ハーンはその宗教観をのぞき、スカダーと氣質的に和合したと思われる。おそらく、彼は自らの理想主義的な傾向とスカダーのそれが、重なり合うことを認識していたのではないだろうか。そしてスカダーが一八九八年に編集長を辞して以降、ハーンと『アトランティック』誌との関係がしばらくの間途絶えていることも、以降の『アトランティック』誌の動向を照合すると、興味深い問題である。

二 ハイ・カルチャーとは

ハイ・カルチャーという概念は、「卑俗な」大衆文化と「真正の」文化を区分しようという意図をもって、一九世紀末にその存在が立ち現れたと言えよう。その意味では差異の産物であり、その構築過程には当時のエリート知識人たちや前章で論じ

た『アトランティック』誌が、おおいに関わっている。ローレンス・W・レヴィーンは、一九世紀後半に劇やオーケストラで参加型の観客が「受動的な観客」へと変容し、そしてその過程に知識人の度重なる介入があったことを指摘する。そして、知識人は意に沿わない自発的に参加する観客を、概して「わがまま (selfish)」で、秩序を乱す存在とみなし非難する傾向があった¹⁰⁾。したがって知識人が考える「秩序」とは、自制にもとづく人々の振る舞いを前提とする。

先に引用したブロードヘッドも、レヴィーンを引用し、その過程が雑誌文化にも通じることを指摘する。彼は、一九世紀後半に起こったエリート文化の中央集権化に、『アトランティック』誌をはじめとする「クオリティ・マガジン」が関与していると主張する。彼は、雑誌の読み手が限られているという短絡的な断定には警戒しつつも、それらの雑誌の記事や編集方針が、特定の読者層を想定していたことを指摘する¹¹⁾。

これらの雑誌は、「出版側が」出そうとする記事の、まさにあらゆる号のあらゆるページで、想定される読者を特定している。一九世紀の『アトランティック』、『ハーバーズ』、そして『センチューリー』で、工場労働者、移民、農民、鋳夫、事務員、売り子、そして秘書を代弁する記事を探しても、おそ

らくむだである。¹⁶⁾

ここで列挙されているのは、当時の労働者階級と結びつくカテゴリーである。すなわち、労働者階級の利害を不純物のように扱い排することで、これらの雑誌がその立ち位置を確保したと言ひ換えられるだろう。

一九世紀後半、そのような区分に用いられたひとつの尺度が「文化 (culture)」で、それを体得することが社会で「道徳的秩序を生む原動力」だと信じられた¹⁷⁾。レヴィーンは知識人たちが文化に付与した価値を、以下のようにまとめる。

秩序は、合衆国に真の文化を確立し正しく認識するための価値基準を創出・保持するのに必要な手段だった。それは妨害を受けず薄められることもなく、大衆や市場の要求にも無縁の文化、気高くし高尚にして清めてくれるような文化、蔓延する混迷や疎外感、無力感からの避難所となる文化である。¹⁸⁾

文化とはある種の理想像を前提とした何かであることが、以上の引用から見えてくる。ここで理想の何かと対置されているものは、大衆化や資本主義である。そしてこの文化観は、人間のあるべき理想的な姿とも結びつく。後述することになるウォ

レン・I・サスマンはそのような自己の理想像を、「品格 (character)」と「¹⁹⁾概念で説明する²⁰⁾。そしてレヴィーンは、そのような品格を兼ね備えた「教養人」がリーダーとして人々を導くべきだという発想が、一九世紀後半に顕著になると主張する²¹⁾。二〇世紀前半までの自己概念を概説する箇所では、ジョン・シェリー・ルービンは、品格の概念が理想とする人間像を、以下のように説明する。

大まかに言うると、「品格は」統一、平衡、そして抑制……を表した。品格を備えた人物は、内面としての自己を厳然と自覚することによって活動するのみならず、矛盾めいているが無私でもあった。彼らは、公共精神を持ち道徳的義務を熟知していて、抑制のない自己表現よりも義務を果たすことに専心した²²⁾。

「抑制」、「道徳」、「無私」、「公共精神」、そして「義務」など、ハインの日本時代の作品を読んだことがある読者なら、以上のことばにごく近似する語彙を作中に見出したことがあるだろう。この問題意識が彼の日本での生活で喚起されたことは確実だが、その根源は西洋、とりわけ一九世紀アメリカのハイ・カルチャーの価値規範にあるといえる。それは、自制を旨とし、反資本

主義的で、またエリートによる先導を容認する。

三 道德観の変容

ハーンの世界を読んだことがある者なら、彼が作中でしきりに道德を提起する顕著な傾向があることに気づくのは、おそらくさほど難しくない。いわゆる再話とされる作品にも作者の見解が挿入されるものが少なからず存在するが、その多くは道德的なことがらを問題とする。たとえば、『心』に収められている「ハル」という作品は、不貞行為をしていると思わしき夫を、妻が寝ずに何日も待つという筋書きだが、この作品も女性の美徳を一般化することから話が始まる。

ハーンはこのように、読者に道德を喚起させようとする顕著な傾向がある。そしてその傾向は、一九世紀後半のアメリカで起きていた変容と無縁であるとは考えにくい。それは大きくまとめると「資本主義化」といえるが、この時期の資本主義化は白人中産階級層の道德観や自己認識の変容を促す、最大の要因だったと考えられる。

ダニエル・ホロヴィッツは、一九世紀後半から二〇世紀の前半にかけて、道德をめぐる言説が変化していることに着目し、「伝統的道德主義者 (traditional moralist)」と「現代的道德主

義者 (modern moralist)」とのあいだの差異を考察する。この両者の言説は、自制の保持、反商業主義、快楽の否定、そしてより高次の何かを求めようとする共通の志向があることを指摘しつつも、ホロヴィッツはその差異の根本を、「消費」(consumption) という概念のもつ意味合いの変化に求める。伝統的な道德を支持する者にとって、消費は快楽につながる可能性を秘めた嫌悪すべきものであった。しかし他方で二〇世紀的な道德を支持する者は、資本主義の拡大にともなって「大量生産と大量消費をつくり合わせることを重視」し、それまでの自制や自己否定にもとづく自己の概念を、より消費社会に適合する形で修正を施そうとした¹⁸⁾。

また前述のサスマンは、自己認識の理想像が、一九世紀後半から二〇世紀前半を境に変容したことを指摘する。一九世紀の自己の理想は自制を旨とする「品格」の概念でまとめられる一方、二〇世紀以降のそれは自己実現を旨とする「個性 (personality)」の概念に収斂すると主張する。彼は「品格」の自己像自体はいままも残っていると前置きしつつ、以下のように述べる。「二〇世紀の最初の十年の半ば、どこかを端緒として、別の自己の型、別の自己陶冶や統制の像、社会における自己表現の手法が急速に発現した¹⁹⁾。」

このような一九世紀後半における三つの文化状況を手がかり

にすると、ハーンが語っている対象やその価値規範が見えてくる。さらにつけ加えるなら、これらのことを明らかにすること、彼の文学作品の本質もより明確になるのではないだろうか。彼の徹底的な道徳志向は、反資本主義や理想主義の傾向をも、同時にあわせもつ。ハーンは道徳観を中心とした価値規範の変容に対し伝統的な人間像や社会像を掲げ、旧来の価値規範を擁護する側に立ったと言えるだろう。

四 道徳への目覚め

本論文の後半はハーンの商品が、これまで論じてきたような一九世紀のアメリカの状況と、いかに連動しているかを考える。とりわけ、のちに中心のとりあげる「ある保守主義者」は、主人公が西洋志向の果てに日本へ回帰する内容である。そして前述の平川はこの作品が持つ構造が、ハーンが当時置かれた心境の裏返しとも読める可能性を指摘する。平川は、ハーンの方法的な帰化と「文化的な帰属」を分けて考えることの必要性を示したうえで、彼の執筆動機が、登場人物への共感にとどまらず、彼の西洋への回帰志向にもあったのではないかと考える。そしてこの「回帰」とは、異郷の地で祖国の文化の価値を知ることであり、またそれを語り伝えようとする思いであると、平川は

続ける²⁰⁾。

この議論を受けると、ハーンは、日本で西洋の何かに価値を見出したことになる。それは、前述の議論を受けると、「品格」に収斂する自己や社会の理想像がもつ意義の有用性と言えるだろう。ある時点を境に彼の作品には、道徳や自制、規律など、「品格」を語るための語彙が数多く現れるようになる。彼は、その最初の著作『知られぬ日本の面影』の導入部で、日本の西洋化されていない生活を道徳的観点から高く評価する。

もしその中に相応の幸運と共感をもって入りこめれば、「日本人の生活は」西洋の観察者にとってけっして飽きることはない。またそれは、観察者にわれわれが誇る西洋の進歩の道筋が、本当に道徳の発展 (moral development) へと向かっているのか、ときどき疑問を抱かせる²¹⁾。

ハーンはこのような問題意識は、来日後ただちに喚起されたとは思えない。丸山学は、『知られぬ日本の面影』が日本の習俗を記述した民俗学的スケッチであるとすいっぽうで、次作『東の国から』ではその観点からの記述が減じていることを指摘する²²⁾。丸山はこの変化を指摘するにとどまっているが、このような作風の変容は、ハーン自身の関心が民俗学の問題か

ら道德の問題へと移行していることも、おおいに関係していると考えられる。『知られぬ日本の面影』では、日本人の精神や内面への考察よりも、日本の行事や神社仏閣などに代表される、異文化の習俗である外的なことがらを紹介する紀行文的な内容のものが多く、これは、ハーン自身の来日のきっかけが、ハーバー社による日本に関する紀行文執筆の提案に由来することも、関係があるだろう。『ハーバース・マンズリー』は、おもな題材を異郷に取材した紀行文に求め、それによって販売部数を伸ばした^②。その関係は来日後まもなく断絶するものの、これが彼の視点に変化をただちに及ぼすものではなかった。

しかし、ハーン作品にはやがて道德的な問題意識が前面に出た内容が急増する。その問題意識を喚起した要因は、儒教倫理を承継する日本人の教育に関わったこともひとつにあるだろう。彼がもつ道德的な問題意識は、先ほど引用した箇所に見れるように、西洋の資本主義化が道德を軽視していることへの疑念として、西洋至上主義からの脱却を図ろうと試みる態度として示される。

この時代の知識人に、資本主義化された西洋社会の道德観を批判すべく、より「未開な」ヨーロッパの中世社会や東洋を道德的な観点から高く評価する者がいたことは、T・J・ジャクソン・リアーズがその著作で指摘している。彼は、ハーンのこ

とを文明化への批判から東洋を志向した代表的人物として、本文でも取り上げている^③。しかし、ハーンにこのような東洋趣味と道德的優位を結びつける意図があったにせよ、彼の見解は、日本での生活と考察を重ねるにつれ、リアーズが示す到達点よりもさらに深化したと思われる。

ハーンは、単なる西洋至上主義からの脱却を企図し、東洋趣味に走ったわけではなかった。むしろ彼は、日本での生活と考察を通じて、西洋にある理想を問い直し、その正当性を確信したのである。彼が考える理想とは、個々人の自制にもとづく、秩序立った社会である。これを「道德的社会」ということができるだろう。彼は、理想とする道德的社会の達成度合いを問題の核心においている。すなわち、彼の作品に通底する問題意識のひとつに、その理想的社会像をものさしとするならば、彼は西洋より日本のほうがより高水準にあると判断していることがある^④。この傾向は、以下の箇所によく現れている。

〔……〕人間の心が人間の知性よりもはるかに価値があると、そして遅かれ早かれ人間の心があらゆる過酷な人生の謎に、よりよい回答ができるようになること、これらを信じている人間のひとりであることを、私は告白する。私は、日本人の道德的な美しさが知性の美しさよりも優れていることを

理解しているがゆえに、古い日本人がその謎の解決策により近づいていることを、いまも信じている²⁰。

彼は読み手に個人主義的なものを暗示する「心」を引き合いに出すが、実はそこには道徳的な含意がより重く付与されている。ハーンはおそらく『心』に掲載される一連の著作を執筆するに至って、日本に身を置く西洋の文筆家としての使命を認識したと思われる。それは、日本の優れた道徳性を西洋に語り伝えることで、その読み手に、それまでの自制を軸とした道徳的社会的意義を再確認させる試みであったといえる。そしてその信念こそが、彼をして「ある保守主義者」を書かしめた、ひとつの主たる原動力ではないだろうか。

ハーンがキリスト教を痛烈に批判しようとした意図も、おそらく道徳的観点から論じることができる。彼のキリスト教批判は、その理想ではなく現状に向けられており、分けて考える必要がある。彼の宗教観もまた、宗教がいかに道徳的に有用で、人々の自制に寄与しているかという問題に収斂する。レイ・マツキンレー・ローレスが指摘するように、彼は「反キリスト教主義者」であっても「反宗教主義者」でなく、宗教の意義はかたく信じていた²¹。したがって彼のキリスト教批判の根底には、それが道徳的社会的な作り上げのことに寄与せず、むしろ彼が考

える墮落に加担しているという解釈があると思われる。対照的に、彼は日本の先祖崇拜や仏教、そして儒教などの宗教が人々の自制を促す役割を果たし、理想とする道徳的社会的形成にも寄与していると考えたのである。

同様に、このようなハーンの志向は、自己実現を旨とする社会への変容に対する批判的な論調としても現れる。二〇世紀を予兆させる個人主義や消費社会の台頭は、彼にとって好ましいものではなかった。たとえば「ある保守主義者」において、主人公が無駄の多い西洋人の生活に対し、「清貧」や「無私の儉約」こそ、日本が西洋に対抗する術だと悟る箇所がある(二〇六)。そして、日本における個人主義の欠如に積極的な意義を見出しながらも、そう遠くない将来に日本でもそれが台頭することを予見した「日本文明の気質」の展開は、ホロヴィッツやサスマンがその論考で提起するアメリカの世紀転換期の変容と、まさしく並行する見解であるといえるだろう(「日本文明の気質」三六一七)。このように、ハーンの日本に関する作品は、当時のアメリカ情勢を確実に作中へと刻み込んでいる。

五 「ある保守主義者」―西洋の理想への回帰

道徳を志向し、西洋の理想を東洋に見出すハーンの執筆態度

が確立したひとつの成果のあらわれが、来日後第三作の『心』に掲載された一連の作品である。とりわけ「ある保守主義者」は、先の平川の引用が示すように、彼の語るべきことが明確に示された作品だと考えられる。したがってこの作品は、ハーンの文学を全体像として考えるうえで、非常に重要な意味を持っているといえるだろう。「ある保守主義者」というタイトルも、人間のあり方に関して、自己実現よりもむしろ自制にハーン自身が力点を置いていることを暗示していると思われる²⁸。本章では、この作品にハーンの西洋の理想への回帰が読み取れることを、考察してゆく。

「ある保守主義者」は、士族階級に属する、とある日本人男性の半生を記した作品である。この人物のモデルは完全に虚構の存在ではなく、『心』の最初で献辞を贈られた、雨森信成（一八五八—一九〇六）である²⁹。

「ある保守主義者」に登場する主人公の男性が、どのような人物として描かれているかを確認したい。彼は、幼いころから「自制」や感情の抑制、快楽の否定などを旨とする「規律」のある教育を受けている（一七二）。彼は、その知性をもって、大衆に対する「品格」の向上に尽くすことを最後に決意して帰国することになるが、このような思考はハイ・カルチャーに属する知識人のエリート主義的な発想を、思い起こさせる（二〇五

—六）。また、道徳を旨とする理想主義者でもあり、その理想の実現のために宗教が有用なことをかたく信じている。このように、彼の人物像を語る語彙と一九世紀的な価値規範にもとづく理想的人物像の語彙は、ほぼ重なり合う。

彼は当初キリスト教の理想が、彼の受けた儒教教育と同じく「自制」（一八七）を旨としていることを知り、それを高く評価する。この認識が、彼の国内外の西洋体験でいかに変容するか。この変容に関連するひとつの大きな柱が宗教の理想と現実の落差である。この落差の最大の手がかりは、宗教をめぐる転向である。先述のように、ハーンもこの主人公の男性と同じく、日本において「悪の宗派」（一八七）とされてきたキリスト教の倫理観と儒教のそれが相通じる要素を共有していることに、おそらく気づいたのであろう。主人公の男性がキリスト教へ転向するのは、先述したように「自制」を旨としていること、その理想が彼にとって「まったく新しくないこと」（一八八）、すなわち自身がそれまでの教育ですでに体得したこととの類似を察知することがきっかけである。彼はその理想に惹かれ、やがて先祖伝来の宗教を棄て、さらには勘当や村八分にされてまで、いったんはキリスト教に転向する。彼の転向の意図は、後にキリスト教を棄教したときに明らかにになるが、「文明と宗教のあいだに内在する関係の真理」、すなわちキリスト教の理想こそ

が西洋文明の源なのではないか、という理解に発端する(一九五)。そしてこの作品において注目すべきは、この作品が、宗教が道徳の衰退に加担している現状を批判する一方で、宗教それ自体の理想に関する批判を一切行っていないことである。その意味でこの作品は宗教の現状批判で、その理想批判ではない。主人公の男性がキリスト教に転向することは、西洋の理想を有意義なものと解釈するハーンの見解も、実は同時に明らかにしていると考えられる。主人公の師であるキリスト教伝道者は、優れた文明と優れた宗教は対等な関係にあるという、西洋を無条件で優位に置く文明論の持ち主として描かれる。しかしハーンは、文明がもたらす新たな価値規範に属する競争が、道徳を低下させているという見解を示す。

中国の知恵で教育され、また西洋の社会進化の歴史を当然知らなかったこの時代の若者は、キリスト教の理想とまったく和合せず、またあらゆる偉大な倫理体系とも相容れない苛烈な競争によって、物質的な進歩の至上形態に至ったことには、全然思いもよらなかった。(一八九)

ハーンはここで、苛烈な競争が西洋文明の根源にあり、それがキリスト教の理想や「偉大な」倫理体系に反するものだ、と

いうことを述べている。このような展開に、西洋絶対の文明論を、東洋を通じて相対化しようと試みる作家の意図を読み取ることとは、われわれのような百年後の読者にも、おそらく容易なことだろう。しかし、このようなキリスト教の理想や偉大な倫理体系が競争によりもたらされた物質主義とは相容れないという議論展開には、別の意図を読み取ることもまた可能である。それは、ハーンがここでキリスト教の理想や優れた道徳体系を比較の前提とし、現状を批判していることである。そしてこの比較は、彼自身が優れた倫理やキリスト教の理想自体を尊重する姿勢を暗黙裡に示唆しており、キリスト教の理想ではなく現状を批判する、彼独自の見解を同時に明らかにする。

前章で述べたように、ハーン自身のキリスト教批判は、彼の理想というべき自制にもとづく道徳的社会的の実現に寄与しないどころか、むしろ物質主義や個人主義を煽る墮落を招く存在と彼が認識していたことに、根本的な原因があると思われる。ここで描かれる宣教師の文明の成果と宗教を安易に結びつける態度にも、物質主義へ加担して道徳心の向上に貢献していないキリスト教に対する、彼の批判的思考がおそらく反映しているのだろう。

そして、その本拠である西洋見聞以前に主人公の男性が日本でキリスト教を見限ることは、理想と現実との落差が救いがた

いほどに大きいことの現れとも考えられる。にもかかわらず、彼は外遊を求める。そこにはキリスト教の理想にいったんは共鳴した者の思いが、棄教してもなおくすぶっている。したがって彼の外遊は、宗教の「保守し抑制する力」や「道徳への宗教の影響」を確認する意味を帯びる(一九五)。半ば失望しつつも、キリスト教の理想が社会にどう還元されているかを直接確かめる意味がこの外遊になおも付与されているが、このことは、彼にとって宗教の理想に内在する価値自体は減じていないことの現れとも解釈でき、ハーンのキリスト教の理想を尊重する姿勢も、このような主人公の男性の態度によって裏づけられる可能性がある。

主人公の男性の見聞は、宗教が人々の自制を促す役割を担っていないことを、確認するだけのものとなる。宗教はフランスで利己心を助長する役割に加担し、またイギリスでも「売春や飲酒」などの放縱を黙認している(一九八―二〇〇)。このことは、彼が当初考えていた、宗教、すなわちキリスト教が優れた西洋文明を生み出したという推論が、根底から覆ることを意味する。むしろ、宗教はその影響力さえ窺わせないほどに、人々の生活から大きく後退している。それが仮にあったとしても、少なくとも彼が考える宗教観とは大きく異なったものである。

主人公の男性は、宗教のみならず「知性」のありようもその

西洋見聞で目の当たりにし、幻滅することになる。知性も宗教と同じく、道徳的墮落に手を貸している。ここでいう道徳的墮落とは宗教的墮落と同じく、資本主義や個人主義などの価値規範と知性が結びつくことである。とりわけフランスで、彼はその国の知性を代表する人物が墮落に関与しているありさまを目撃する(一九九)。「アトランティック」誌のところで言及したように、卓越した知性は道徳と結びつくことでより高次な理想へと至るのならば、このような状況が、理想とはほど遠いことは明らかだろう^③。

この主人公が西洋見聞から導いた結論は、「古い日本」にある伝統的な道徳や理想を守り、それを先導する役割を果たすことである(二〇六―二〇八)。彼の態度は、物質主義に堕ちないこと、自制を貫くこと、そして自らが大衆の生きた手本となるべく決意すること、これらの点で、先述したアメリカのハイ・カルチャーが志向する理想的人間像とも、重なり合う。

むすび

自著の最大の読者層がアメリカの知的エリート層であること、を熟知していたハーンは、「ある保守主義者」の男性主人公のように、キリスト教の理想と儒教的な理想とのあいだに、類似

を見出していた。ハーンはことさらに東洋人と西洋人のあいだの差異を強調する傾向があるが、道徳的社会的理想においては、両者に相通するものを読み取っていたと思われる。なぜなら、彼は両者の埋めがたいほどの差異を示すにもかかわらず、サスマンのいう「品格の文化」にまつわる語彙を、日本のそれに近似した現象を説明するために、格段の定義を行わずに用いているからである。「ある保守主義者」から、その一例を引く。

慈悲的で義理に篤い日本古来の文明は、それが幸福感を内包していること、その道徳的な志の高さ、そのより壮大な教義、その嬉々とした勇猛さ、その素朴さと無私の精神、その真面目さと足るを知る心、これらの点において比較の余地なく優れていた。西洋の優位は倫理的なものではなかった⁽¹⁾。(二)

○四、斜字体原著者

ハーンが西洋と東洋において本当に差異があると考えたのは、

その道徳的社会的理想が、どのくらい高水準で達成されているかということである。彼は、欲望や自己実現につながる資本主義や個人主義に流され、また基幹となる宗教ですらその推進に加担している西洋社会よりも、道徳や自制にもとづく美徳をまだ失わず、宗教がそれに寄与する日本社会を、高く評価したのである。彼の作品に見られる道徳重視の傾向は、日本からより洗練された自制の美徳を発信することで、アメリカの読者に対しその意義を再確認させることが、最大の使命と自認したことによる。

ハーンの著作を一九世紀のアメリカに還元し読むことは、彼が単なる日本びいきの観点だけから著述を行っていたのではないことを明らかにする。彼は、西洋の行く末を切実に案じ、一九世紀的な自制に依拠しながら、二〇世紀を予示する個人主義や資本主義に対して抗った。彼は終生、「西洋の」保守主義者であり続けた。

- (1) Richard H. Brodhead, *Cultures of Letters: Scenes of Reading and Writing in Nineteenth-Century America* (Chicago: U of Chicago P, 1992), 5.
- (2) *Glimpses of Unfamiliar Japan, Out of the East, Kokoro, Gleanings in the Buddha Fields, Kwaidan* 五世 平川 小泉八雲の『浮城物語』、岩波書店、一九九四年、一七五—一九頁。
- (3) 平川祐弘『小泉八雲とカミカサの世界』新潮社、一九八八年、一三六—一五八頁、太田雄三『カミカサ・オ・ノーン——虚像と実像——』岩波書店、一九九四年、一七五—一九頁。
- (4) Nancy F. Cott, *Public Vows: A History of Marriage and the Nation* (Cambridge: Harvard UP, 2000), 111-20.
- (5) コロビ引用したエラリー・セグウィックは、一九〇七年の『アトランティック・マンズリー』の買取に関わった人物（一八七二—一九六〇）と同姓同名の、一九四二年生まれのアメリカの学者である。
- (6) Ellery Sedgwick, *Atlantic Monthly, 1857-1909: Yankee Humanism at the High Tide and the Ebb* (Amherst: U of Massachusetts P, 1994), 8, 24.
- (7) *Ibid.*, 25. Brodhead, *op. cit.*, 153.
- (8) Sedgwick, *op. cit.*, 238. なお同書によると、『アトランティック』誌刊時の売上は三万部で、一八九〇年代の Century 誌は二十万部超の、そしてより大衆性の強い他誌には、五十万部超の売上があるものもあった。*Ibid.*, 12.
- (9) Sedgwick, *op. cit.*, 11-17, 200-43.
- (10) Lawrence W. Levine, *Highbrow/Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America* (Cambridge: Harvard UP, 1988), 171-242.
- (11) Brodhead, *op. cit.*, 126.
- (12) *Ibid.*, 124. 前掲の『カミカサ』の同巻の題詞の日本語訳を『浮城』の Sedgwick, *op. cit.*, 4-5.
- (13) Levine, *op. cit.*, 200.
- (14) *Ibid.*, 206. 本引用は、青山菜穂子博士の日本語訳を参照した。
- (15) Warren I. Susman, *Culture as History: the Transformation of American Society in the Twentieth Century* (Washington: Smithsonian Institution P, 2003), 273.
- (16) Levine, *op. cit.*, 215-6.
- (17) Joan Shelley Rubin, *The Making of Middlebrow Culture* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1992), 3-4. 語彙を参照する点、原典を付す。
- In broad outline, the word denoted integrity, balance, and restraint.... Animated by a firmly grounded sense of self as interior, persons of character were also, paradoxically, selfless. Public-spirited and cognizant of moral obligation, they were committed more to the fulfillment of duty than to uninhibited self-expression.
- (18) Daniel Horowitz, *The Morality of Spending: Attitudes Toward the Consumer Society in America, 1875-1940* (Chicago: Ivan D. Lee, 1992), xvii-xxix, 134-65.
- (19) Susman, *op. cit.*, 274.
- (20) 平川『小泉八雲とカミカサの世界』二六八—二七六頁。

